

人権コラム 11月号

おとなの学び研究会

大阪教育大学 岡田耕治

新型コロナウイルスの影響は、私たちの日常を一変させました。私の中で起こった変化の一つは、「命」について考えるようになったことです。人は必ず死ぬ。人生は一回しかない。人はいつ死ぬかわからない。この真実を、私たちは、少なくとも私は、先送りしてきました。この度、否応なく死というもの、いのちというものと向き合う、そんな機会が訪れたのです。この変化は、私に今日一日をどう生きるのかと問いかけてきます。

この問いは、しかし、いくら自分ひとりで考えても答えが出せません。私は「おとなの学び研究会」という仲間を持っています。小・中学校や大学の教員、ボランティアで学校に関わる人、企業の人権担当者、市役所の人権啓発担当者、部落解放運動に携わる人、市会議員などなど、多様な仲間が集まり、月1回例会を開いています。集まる目的は、人権について「まじめなおしゃべり」をすることですが、4月からはウェブ会議システムを活用して実施しています。

おとなの学び研究会がスタートして十一年になりますが、何時の頃からか、私たちは、この月1回の集まりを心待ちにするようになりました。特にこれといったテーマを決めて研究会を開くわけではありません。このひと月、自分が気になった記事等を持ち寄り、なぜそれが気になったのかを話していく、それだけの時間がとても貴重なものに思えるのです。

「複眼」という言葉があります。最近気に入っている『現代新国語辞典』（三省堂）には、「多くの小さな目が集まって、全体で一つの目のようなはたらきをするもの」と。私たちは、まさにこの複眼で世の中を見ることができるので、月1回の集まりをたのしみにしているにちがいありません。複眼をもてるかどうかは、自分とは別な生き方、ものの見方をしている人たちと、どれくらい深くて広いつきあいをするかにかかっているからです。

次回の研究会には、初めに書いた私の二つの「問い」をなげかけてみようと思っています。